

自律した語彙学習につながる英英辞書の効用

金 志 佳代子

1. はじめに

言語学習において、語彙の知識は必須のスキルである。Nation(2001)は、言語習得には15,000語から20,000語が必要な語彙数であり、少なくとも95%の語彙理解がなければ文章を理解することは不可能であるとしている。学習者が、言語習得のための語彙学習を行うにあたって、その言語を聞き、話し、読み、書く技能を身につけるためには、授業内だけでなく授業外でも英語に触れる機会を増やす指導を行う必要がある。また、学習者は、これら4技能を習得すると同時に、実際に言語を使用する場面にあっては、自身が表現したい内容に合う語彙を使用しなければならない。これを補うため、自律学習の手助けとして、学習者が英英辞書を使用し、適切な語彙・表現が使えるような指導を目指すことが重要となる。しかしながら、英英辞書は、電子媒体の辞書として汎用性のあるものではあるが、実際に普段から英英辞書を使用している日本の学生はそれほど多くはない(金志, 2011)。その理由として、辞書の見出し語の定義で使用されている単語の意味が理解できないことがあげられる。そこで本稿では、英英辞書の定義語を習得することで、日本の大学生が英英辞書を使用できるようにするために考案された語彙練習テストを実施し、そのテスト結果およびテスト終了後に行った質問紙調査の結果について検証する。本研究で得られたデータ結果は、SPSS統計ソフトを使用して分析を行った。

2. 先行研究

本研究で使用する語彙練習テストは、英英辞書に掲載されている約2,000語の定義語(Defining Vocabulary)をもとに考案された語彙指導教材である。Nation(2008)によると、学習者が英英辞書(monolingual dictionary)を使用するには、少なくとも2,000語を習得しておく必要があり、これが英英辞書の定義語に相当する語彙にあたる。この定義語のなかから、日本の大学生が学習する必要がある語彙を選びだし、語彙リストにもとづいた語彙練習テストを作成した。¹Kinshi(2009)

¹ Matsui et al. (2004) は、本文中 3 つの英英辞書に共通する定義語 1,072 語をもとに、学生を対象とした語彙認識調査(Familiarity Survey)を行い、認識度が90%に満たなかった語彙(492語)と'verb'、'noun'などの文法事項に関連した語彙(8語)の合計500語からなる語彙テストを作成した。

は、*the Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2000)、*the Cambridge International Dictionary* (1995)、*the Longman Dictionary of Contemporary English* (2000) の3つの英英辞書のうち2つの辞書に共通する384語を抽出し、そのうち数詞、前置詞などを除いた300語からなる語彙リストをもとに、語彙練習テスト(Vocabulary Practice 2008)を作成した。この語彙練習テストは、60単語×5回のテストを2セット準備することで、300単語すべてが空所補充型、定義文型のどちらかの解答となるように構成されていた。Okada et al.(2009)において、約170人の日本の大学生を対象にVocabulary Practice 2008を実施した結果、プリテスト・ポストテストのC-Testのスコアとともに、語彙練習テストのスコアの向上が認められた。また、アンケート結果より、学習者が語彙学習をきっかけに英英辞書を使用することに興味を持つようになったことを報告している。このVocabulary Practice 2008と2回のC-Testには、それぞれ.59、.68 ($p<.001$)と中程度の相関が見られたものの、C-Testは文脈に依存した(context-dependent)能力を測るテストである一方で、Vocabulary Practice 2008は文脈には依存しない(relatively decontextualized)テスト、つまり、ある程度制御された語彙の産出能力(controlled productive ability)を測るテストであり、語彙の屈折や派生のような語彙知識を測る点において異なるテストであると言える。このことから、より文脈に依存した改訂版の語彙練習テストVocabulary Practice 2010が開発されることになった(金志, 2011)。

Vocabulary Practice 2010は、文脈に依存した問題形式が特長となっている。学習者は、語彙の最初のアルファベット数文字をヒントにして、空所補充型、定義文型の文の空欄を埋めて解答する。この語彙練習テストの改良点は、以下のとおりである。(1)1回の語彙練習テストで確認する単語は60単語から30単語に減らす、(2)30単語のうち15単語ずつが空所補充型、定義文型の解答になる、(3)語彙リストの300単語のうち約25%にあたる74単語は、実際の語彙練習テストでは品詞を変えて出題する(例:absence → absent)。以下は、Vocabulary Practice 2010の一例である。

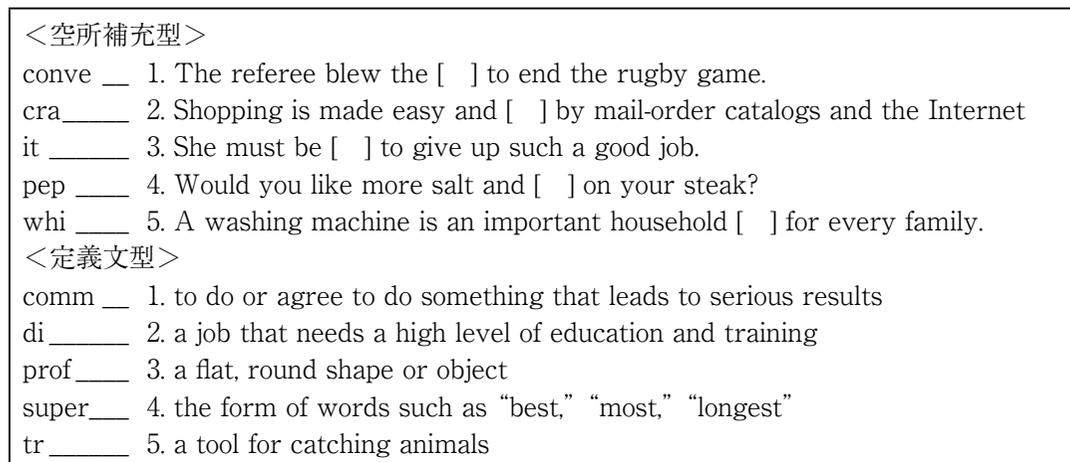


図1 Vocabulary Practice 2010の一例

Vocabulary Practice 2010では、ヒントとなる単語は、5問ずつアトランダムに並べられているため、学習者は空所補充型、定義文型の文脈に沿って解答しなければならない。つまり、英文全体を読んで意味を理解し、解答として選択した語彙は、必要に応じて適切なかたちに変えることが求められる。

以上のことから、本研究では、以下の2点を研究目的とする。

- (1) 語彙練習テストを実施することで、ポストテストのスコアが向上するかについて検証する。
- (2) 語彙練習テストと学習者の英語力の向上に対する認識との関係を明らかにする。

3. 研究方法

3.1 調査対象者

本研究での調査対象者は、関西地区の大学生41人である。授業は、英文法の総復習を中心とした半期15回の演習クラスである。受講生は、選択科目として履修することができるが、英文法の基礎固めを目的としたこの授業は、TOEFL-IPT 500未満の学生が対象となっている。

3.2 指導手順

まず初めに、初回の授業で学習者のレベルを測るためのプリテストとしてC-Testを実施した。次に、語彙練習テスト(Vocabulary Practice 2010)を実施するにあたって、語彙学習のための便利なツールとして英英辞典を紹介した。具体的には、英英辞書を使うとい

かに単語の意味が理解できるかを事例でもって説明した。たとえば、英語の“career”は「仕事・生涯・キャリア」として一般に認識されている単語である。*Cambridge Learner's Dictionary* (2004)によると、次のように定義されている。

career: a job that you do for a long period of your life and that gives you the chance to move to a higher position and earn more money

この定義によると、“career”は、「短期の仕事ではなく、職位・賃金を高めながら生涯かけて従事する仕事」である。英英辞書使用への動機付けを高める指導を行うことで、学習者は、日本語で理解している英単語の意味と、実際に英語で定義された意味とのニュアンスの違いを新たに発見・理解することができる。さらに、学習者が英英辞書を使用する機会をつくるため、語彙練習テストで出題される300語のうち、テスト1回分の30単語からなる語彙リストを10回に分けて配布し、各自で英英辞書を用いて意味・用法・派生語を確認してくるよう指示した。また、2週間後に各自で学習した語彙をチェックするための語彙練習テストを実施することを伝えた。それ以後は、テストを実施する2週間前から、学習者に語彙リストを配布し、10週にわたって、語彙練習テスト(計10回)を実施した。テストは、実施直後に学習者に解答を確認させ、間違えた箇所を必ず見直すよう指示した。また、教師は答案を回収後、クラスで正答率が特に低かった単語5つを取り上げ、翌週のクラスで学習者が再度復習できる機会を設けた。最終回となる第15週目の授業では、学習者の到達レベルを測るためのポストテストとして、C-Testを実施した。最後に、語彙学習を振り返っての学習者の認識を検証するため質問紙調査を行った。

4. 結果

4.1 語彙練習テスト(Vocabulary Practice 2010)とプリテスト・ポストテスト(C-Test)

10回の語彙練習テストで得られたスコアの平均値と標準偏差は、表1に示されたとおりである。

表1 Vocabulary Practice 2010のスコア結果

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
test1	38	8	28	22.1	4.92
test2	35	16	30	25.0	4.11
test3	36	3	30	23.5	5.05
test4	36	17	30	25.1	4.02
test5	34	12	30	24.8	4.27
test6	33	4	29	22.9	5.38
test7	34	18	30	26.0	3.33
test8	36	14	30	27.0	3.59
test9	32	19	30	27.4	2.88
test10	36	9	30	24.7	5.21

30点満点の10回分のテストを比較すると、22.1点から27.4点と平均値に差はあるものの、標準偏差は2.88から5.38におさまっている。テスト10回分の平均値のクロンバックのアルファは、 $\alpha = .86$ と高い値が得られた。したがって、語彙練習テストは一貫性が保たれていると言える。

次に、表2は、プリテスト・ポストテストとして実施したC-Testのスコア結果と標準偏差である。ポストテストの平均値が7.5点(=84.6-77.1)上がり、標準偏差は、ポストテスト(12.14)がプリテスト(14.46)より小さくなっている。このことから、ポストテストのスコアが、より平均値に集中していることがわかる。また、プリテストとポストテストの相関係数は.74($p < .001$)であり、クロンバックのアルファは $\alpha = .82$ であった。²

表2 C-Testのスコアと標準偏差

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
Pre-C-Test	37	49	96	77.1	14.46
Post-C-Test	31	54	98	84.6	12.14

さらに、プリテスト・ポストテストとして使用したC-Testの統計差をはかるため t 検定を行ったところ、2つのテストの平均点の間に差があることが示された($t = -4.750$, $df = 27$, $p = .001$)。

² Kinshi (2015) において、Vocabulary Practice 2010、プリテスト・ポストテストのC-Testそれぞれに Normality Test を実施したところ、C-Test は正規分布をなす一方で、Vocabulary Practice 2010 はデータの正規性の前提が満たされず、ノンパラメトリック検定が行われた。

4.2 質問紙調査結果

4.2.1 データ結果

10回の語彙練習テストを実施後、学習者41名を対象に質問紙調査を実施した。調査内容は、学習者自身が語彙学習を振り返り、いかに英英辞書を活用して語彙学習に取り組んできたか、語彙練習テストを通してどのようなスキルを身につけることができたかについての10項目からなる質問で構成されている。質問項目と各項目の回答率、回答の平均値、標準偏差は表3に示されている。各項目のデータは、4(強くそう思う、非常に当てはまる)から1(そうは思わない、当てはまらない)を用いた。また、質問6、質問7は3つの選択肢を使用し、質問8、質問9、質問10については、5(わからない)の項目を追加した。

表3 質問紙調査回答結果

質問項目	(%)					平均値	標準偏差	回答数(人)
	1	2	3	4	5			
英英辞書の使用								
	(あてはまらない) ←		→ (あてはまる)					
1. あなたは英英辞書を使用することに興味はありますか	2.6	17.9	61.5	17.9	-	2.95	.69	39
2. あなたはこの授業に参加する以前から英英辞書を使用していましたか。	30.8	35.9	28.2	5.1	-	2.08	.90	39
3. あなたは語彙リストの単語の意味・用法などについて調べる際に、英英辞書を使用していましたか。	7.7	33.3	25.6	33.3	-	2.85	.99	39
4. 英英辞書を使うことは、語彙練習テストの準備にどのくらい役に立ちましたか。	0	6.1	54.5	39.4	-	3.33	.60	33
5. 今後、英英辞書を使い続けたいと思いますか。	0	7.9	55.3	36.8	-	3.29	.61	38
語彙練習テスト								
	(適切)							
6. 1回の語彙練習テストで確認する語数(30語)は適切でしたか。	2.6	2.6	94.9	-	-	2.92	.35	39
7. 語彙練習テストの設問のレベルは適切でしたか。	2.6	10.3	87.2	-	-	2.85	.43	39
語彙練習テストの効果								
	(かなり向上)(大いに向上)							
8. 語彙練習テストをすることによって、文法力は向上したと思いますか。	0	61.5	20.5	10.3	7.7	2.64	.96	39
9. 語彙練習テストをすることによって、英文を書く力は向上したと思いますか。	7.7	61.5	10.3	5.1	15.4	2.59	1.21	39
10. 語彙練習テストをすることによって、英文を読む力は向上したと思いますか。	2.6	76.9	10.3	5.1	5.1	2.33	.84	39

- * 問6の1は「もう少し少ない方がよい」、2は「もう少し多い方がよい」、3は「適切であった」
- 問7の1は「もう少し簡単な方がよい」、2は「もう少し難しい方がよい」、3は「適切であった」
- * 問8-問10の1は「全く向上したとは思わない」、2は「少しは向上したと思う」、3は「かなり向上したと思う」、4は「大いに向上したと思う」、5は「自分ではわからない」

まず、英英辞書の使用について、質問1は、「3. いくらか関心がある」、「4. 大いに関心がある」とする回答は全体の79.4%(=61.5+17.9)となった一方で、質問2の英英辞書の使用経験については、「1. 全く使用していなかった」とする回答が30.8%であり、全体の約3分の1の学習者が、これまで英英辞書を使用したことがないと回答した。さらに、質問3では、語彙練習テストのための実際の使用頻度について、回答率にばらつきがあったものの、質問4、質問5については、「役に立った」、「使い続けたい」とする回答が、そ

れぞれ93.9% (=54.5+39.4)、92.1% (=55.3+36.8)を占めた。質問6、質問7の語彙練習テストで出題される語彙数や内容については、大半の学習者が「3. 適切であった」と回答した。最後に、語彙練習テストの効果については、質問8の文法力、質問9の書く力、質問10の読む力ともに「4. 大いに向上したと思う」とする回答は少なく、「3. かなり向上したと思う」、「2. 少しは向上したと思う」とする回答が多く見られた。英語力の向上については、文法力、書く力、読む力は「3. かなり向上したと思う」、「4. 大いに向上したと思う」とする回答がそれぞれ全体の30.8%、15.4%、15.4%を占める結果となった。

では、英英辞書の使用は、英語力の向上に役立っているのだろうか。

表3のアンケート調査の結果を用いて、英英辞書を使用することによって、学習者が英語力向上の変化を認識しているかどうかについての検証を行った。質問8(文法力)、質問9(書く力)、質問10(読む力)それぞれについて、質問3(語彙練習テストのために英英辞書を使用していたか)との関係を示すため、カイ2乗検定を行った(表4-表6)。質問3「英英辞書の使用」項目内の「4. よく使用していた」には「あてはまる」、それ以外の項目には「あてはまらない」とラベル付けをおこなった。また、「文法力の向上」、「書く力の向上」、「読む力の向上」項目の「4. 大いに向上したと思う」、「3. かなり向上したと思う」には「あてはまる」、「2. 少しは向上したと思う」、「1. 全く向上したとは思わない」、「5. 自分ではわからない」には「あてはまらない」とした。

表4より、文法力が向上したという回答は、英英辞書をよく使用した人で38.5%(13人中5人)、英英辞書を使用していない人で26.9%(26人中7人)になっているが、カイ2乗検定の結果、両者には統計的に有意な差はなかった。

表4 英英辞書使用と文法力のクロス表

		英英辞書の使用		合計
		あてはまらない	あてはまる	
文法力向上	あてはまらない	19	8	27
	あてはまる	7	5	12
合計		26	13	39

表5より、書く力が向上したという回答は、英英辞書をよく使用した人で7.7%(13人中1人)、その他の人で19.2%(26人中5人)と、むしろ期待に反する結果となっているが、カイ2乗検定の結果、統計的に有意な差はない。

表5 英英辞書使用と書く力のクロス表

		英英辞書の使用		合計
		あてはまらない	あてはまる	
書く力向上	あてはまらない	21	12	33
	あてはまる	5	1	6
合計		26	13	39

表6より、読む力が向上したという回答は、英英辞書をよく使用した人で15.4%(13人中2人)、その他の人で19.2%(26人中4人)であり、カイ2乗検定の結果、両者には統計的に有意な差はない。

表6 英英辞書使用と読む力のクロス表

		英英辞書の使用		合計
		あてはまらない	あてはまる	
読む力向上	あてはまらない	22	11	33
	あてはまる	4	2	6
合計		26	13	39

上記の結果より、英英辞書を頻繁に利用したとしても、英語力の向上に影響を与えていないことがわかった。

次に、英語力の向上が、英英辞書に対する意識にどう影響を与えるかを調べる。表3の質問8(文法力)、質問9(書く力)、質問10(読む力)それぞれと、質問5(今後も英英辞書を使い続けたいか)との関係についてカイ2乗検定を行った(表7-表9)。質問5「今後、英英辞書を使い続けたいと思いますか」項目内の「4. 大いに使いたいと思う」、「3. いくらか使いたいと思う」には「あてはまる」、それ以外の項目「2. あまり使いたいと思わない」、「1. 全く使いたいと思わない」には「あてはまらない」とラベル付けをおこなった。また、「文法力の向上」、「書く力の向上」、「読む力の向上」については、表4-表6と同様である。

表7より、文法力の向上を認識した学習者のうち57.1%(14人中8人)が英英辞書を今後も使いたいと回答しており、文法の向上を認識していない場合の16.7%(21人中4人)と比べて有意に高い割合となっている(1%水準)。

表7 英英辞書の使用希望と文法力のクロス表

		英英辞書使い続けたい		合計
		あてはまらない	あてはまる	
文法力向上	あてはまらない	20	6	26
	あてはまる	4	8	12
合計		24	14	38

表8より、書く力の向上を認識した学習者のうち35.7% (14人中5人) が英英辞書を今後も使用したいと回答しており、書く力の向上を認識していない場合の4.2%(24人中1人) に比べて有意に高い割合となっている(5%水準)。

表8 英英辞書の使用希望と書く力のクロス表

		英英辞書使い続けたい		合計
		あてはまらない	あてはまる	
書く力向上	あてはまらない	23	9	32
	あてはまる	1	5	6
合計		24	14	38

表9より、読む力の向上を認識した学習者のうち35.7% (14人中5人) が英英辞書を今後も使いたいと回答しており、書く力の向上を認識していない場合の4.2%(24人中1人) に比べて有意に高い割合となっている(5%水準)。

表9 英英辞書の使用希望と読む力のクロス表

		英英辞書使い続けたい		合計
		あてはまらない	あてはまる	
読む力向上	あてはまらない	23	9	32
	あてはまる	1	5	6
合計		24	14	38

上記より、英語力の向上を実感した人ほど、今後も英英辞書を使い続けたいと回答していることがわかった。

4.2.2 自由記述コメント結果

前節で実施した質問紙調査において、自由記述欄を設けておいたところ、41人中20人よ

り回答が得られた。以下は、回答結果をアンケートの3つのテーマ「英英辞書の使用」、「語彙練習テスト」、「語彙練習テストの効果」に分けて記述したものである。

<英英辞書の使用>

- ・英英辞書で毎回調べていたのですが、使用すると勉強になるなと思いました。
- ・英英辞書を使うことで英語そのもののニュアンスを理解することができた。
- ・文によって活用変化が難しかったです。語彙チェックリストのおかげで英英辞書を使う機会が増えました。
- ・英英と英和の辞書ではニュアンスが微妙に異なる物がいくつかあり、語の意味を深く知るのに、英英のよさを知ることができたと思う。

<語彙練習テスト>

- ・日本語を介さない単語学習は真の意味での英語習熟に大いに役立ったと感じます。
- ・復習の良い機会となりました。出題の形式も単に一問一答ではなく、とても良いなと思います。正直、もっと予習してからテストに望めば良かったなと悔やんでいます。
- ・今までにない新しい出題スタイルで、最初はとまどいましたが、だんだん慣れていって、毎回のテストが勉強になってました。

<語彙練習テストの効果>

- ・自分ではなかなか語彙学習の時間を取れていなかったなので、毎回の授業小テストに向けた取り組みができて為になりました。
- ・初めの方は勉強方法もよく分からず、点数ものびませんでした。だんだん覚えていけることを実感してうれしかった。

5. 考察

本研究で実施した語彙練習テスト (Vocabulary Practice 2010) とプリテスト・ポストテストとして用いたC-Testのテスト結果を分析した。語彙練習テストの結果から、10回分のテストの平均値のクロンバックのアルファがかなり高かった ($\alpha = .86$) ことから、語彙練習テストは一貫性が保たれていると言える。また、プリテスト・ポストテスト (C-Test) の結果から、ポストテストの平均値が7.5点上がり、ポストテストの標準偏差が小さくなることで、ポストテストのスコアが、プリテストのスコアと比べて、より平均値に集中していることがわかる。さらに、C-Testの統計差をはかるためt検定を行ったところ、2つの

テストの平均点の間に差があることが示された。このことから、学習者が10回の語彙練習テストに取り組むことで、文脈により依存した(context-dependent)テスト形式に慣れるようになったことが伺える。また、テストに備えて、語彙リストにある単語の屈折語や派生語を確認するよう心がけていた。したがって、ポストテストにおいて、学習者のスコアが向上したと言える。

さらに、語彙練習テスト後に質問紙調査を行った。英英辞書に関心はあるものの、学習者の約3分の1が英英辞書を今まで使用した経験がなく、語彙練習テストに取り組むことで、今回、初めて英英辞書を使用するきっかけとなっている。さらに、自由記述のコメントより、「英英辞書を使うことで、英語そのもののニュアンスを理解」し、英単語に備わる本来の意味に気づくことができる、英英辞書の有用性についても示された。語彙練習テストについては、「日本語を介さない単語学習は真の意味での英語習熟に大いに役立った」と自由記述にあるように、従来の単語テストとは異なり、文脈を把握しながら適切な語彙を解答する形式のため、最初はとまどいを見せる学習者もいたが、徐々に形式に慣れ、勉強法も身につけるようになったことが伺える。

さらに、英英辞書を使用することによって、学習者が英語力向上の変化を認識しているかどうかについての検証を行った結果、語彙練習テストのための英英辞書の使用と英語力(文法力、書く力、読む力)の向上には、統計的に有意な関係性はみられなかった。学習者にとって英語力の向上は、英英辞書を常に使っていたかどうかではなく、辞書を使用した時と使用しなかった時の効果の差を学習者が実感したかどうかの方が重要である可能性があげられる。学習者が「もっと予習してからテストに望めば良かったなと悔やんでいます」と自由記述に述べているように、「時々」あるいは「たまに」英英辞書を使う学習者は、使用した時と使用しなかった時のスコア結果の違いを感じていたと言える。

一方、「今後も英英辞書を使いつづけたいか」について、英語力の向上を実感した人ほど、英英辞書を使い続けたいと回答していることがわかった。また、文法力、書く力、読む力それぞれの項目において、英語力が向上したと感じた学習者のうち少なくとも3分の2以上が英英辞書を今後も使用したいと回答した。さらに、自由記述より「初めの方は勉強方法もよく分からず、点数ものびませんでした、だんだん覚えていけることを実感してうれしかった」とあるように、英語力の向上を感じた学習者は、英英辞書の使用効果を実感しているため、今後も使い続ける意識をもつのかもしれない。

6. まとめと今後の課題

本研究では、語彙練習テスト(Vocabulary Practice 2010)とプリテスト・ポストテスト

のC-Testを実施し、学習者が10回の語彙練習テストに取り組むことで、ポストテストのスコアが向上したことを示した。このことは、学習者が、10回のテストを受けることで、文脈により依存した(context-dependent)テスト形式に慣れるようになったこと、さらに、語彙リストにある単語の屈折語や派生語を確認するよう心がけて学習していたことがあげられる。そして、語彙練習テストに備えて使用するよう指導した英英辞書の使用と、英語力向上の認識との関係については、学習者が、英英辞書を使用した場合とそうでない場合との効果の差を実感していることが示された。さらに、毎回の語彙練習テストに取り組むことで、英語力の向上を実感した人ほど、英英辞書を使い続けたいと回答していることがわかった。

Nation(2008)は、学習者は自身の学びにたいして責任を負う、自律した学習者(autonomous learner)にならなければならない、としている。つまり、自らがどの語彙をいかに学び、実際に使用し、学び続けるかが重要になる。自律した学習者になるためには、言語学習についての知識が必要不可欠である。その方法を教え、サポートするのが教師の役目である。本研究において、語彙学習をとおして英語力の向上を実感した学習者は、今後も英英辞書を言語学習のためのツールとして使用し続けることで、自らが自律した学習者になることが期待できる。

今後の課題として、質問紙調査結果にあるように、英英辞書を使い続けたいという気持ちに至らなかった学習者を対象とした分析も必要である。たとえば、学習者が、英英辞書の定義語を理解するための語彙力(約2,000語レベル)に達していない場合、あるいは辞書の正しい見出し語、定義の意味がつかめない場合、学習者が英英辞書の使用に慣れることなく、二ヶ国語の英和・和英辞書を使い続けることが予想される。また、教師の指導方法についても、学習者に英英辞書を奨励するだけでなく、授業でのアクティビティに英英辞書を取り入れるなど、学習者が英英辞書を使うことに向けさせていくような工夫が、今後、必要とされる課題であろう。

辞書

Cambridge International Dictionary of English. (1995). Cambridge University Press.

Cambridge Learner's Dictionary. (2004). Cambridge University Press.

Longman Dictionary of Contemporary English, Fourth Edition. (2003). Pearson Education Limited.

Oxford Advanced Learner's Dictionary, Sixth Edition, (2000). Oxford University Press.

参考文献

Kinshi, K. (2009). Bringing vocabulary practice into active use: Towards motivated learning. *The Bulletin of the Writing Research Group, JACET Kansai Chapter*, 8, 15-26.

- 金志佳代子 (2011). 「英英辞書使用を目的とした語彙学習と認識調査についての一考察」『JACET関西支部ライティング指導研究会紀要』 9, 25-37.
- Kinshi, K. (2015). Analysing the Reliability of Vocabulary Practice Tests. 『人文論集』 第50巻, 101-115.
- Matsui, S., Okada, T., Ishihara, K., & Pavloska, S. (2004). Toward the use of monolingual English dictionaries: Building knowledge of defining vocabulary. *Doshisha Studies in Language and Culture*, 7, 83-112.
- Nation, I.S.P. (2001). *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nation, I.S.P. (2008). *Teaching Vocabulary: Strategies and Techniques*. Boston: Heinle.
- Okada, T., Ishihara, K., Kinshi, K., & Pavloska, S. (2009). Practice activities with defining vocabulary: Making English dictionary entries more accessible. *Doshisha Studies in Language and Culture*, 12, 1-38.